

『ZOIDS Genesis 風と雲と虹と』第四部「坂東燃ゆ」

城元太

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『神々の怒り』を終えて数百年。惑星Z-iに新たな時代が刻まれていった。

坂東騒乱の申し開きを行うため、平将門は桔梗と共にレインボージャークで再び上洛する。ソラの都で出逢つた遊行僧、空也より謎めいたゾイドを託された将門は、鴻臚館を襲撃した海賊藤原純友のゾイドと対決に至る。そして惑星Z-iには『神々の怒り』に連なる宇宙からの脅威が再度襲来しようとしていた。

目 次

第參拾四話	
第參拾五話	
第參拾六話	
第參拾七話	
第參拾八話	
第參拾九話	
第四拾話	
第四拾壹話	
第四拾貳話	
第四拾參話	
第四拾肆話	
第四拾伍話	
第四拾六話	
第四拾七話	
	52
	48
	44
	40
	36
	31
	28
	24
	20
	17
	14
	9
	6
	1

第参拾四話

筑波の嶺の南東は広く業火に覆われた。

連なる火勢は夜半になつても收まらず、黒煙は高く天空に昇り雷雨を呼び寄せる。

野本を越えたランスタッグの群れは石田の荘にまで侵入する。それに乘じ、戦線を離脱した伴類の小型ゾイド群も一斉に常陸への進撃を開始した。防衛に当たるべきレッドホーン部隊を欠き、惣領平国香たいらのくにか亡きあと^きの石田の荘には対抗する術もなく、ただ無為に、野盜然としたゾイド部隊による焼き討ちの憂き目に遭つた。

石田の館は略奪され廃墟と化し、更に突出した部隊は、一部が服織はとり、大國玉おおくにたま、新治にいはりにまで及び、平良兼よしかねの所領のみならず味方である平真樹まきの支配地にまで達してしまつた。

下総一帯に雷鳴が轟き、やがて激しい豪雨が降り注ぐ。館に永年に亘り蓄えられてきた富も財も全て灰燼と歸し、火災が鎮火した頃には全てが黒い消炭と化していた。

小次郎が藤原玄明はるあきに助力を請わなかつたのは、彼と彼の郎党の予てからの乱行を懸念しての事であつたが、奇しくも予感は的中してしまつたのだ。

野本の合戦の終わつた翌日の昼、小次郎は常陸の惨状と国香の死を知り愕然とした。

徹底破壊を望んだのではない。ただ坂東武者としての誇りを通したかつただけだつた。無我夢中で戦つて、勝利を得たものの、勝者に対する敗者の痛みは余りに大きい。戦に犠牲は付き物であるが、此処まで広範囲に亘つて被害を及ぼすとは予想だにしなかつた。

鬱積していた武士達の怒りが爆発したとも言えるが、切つ掛けを与えてしまつたのは他ならぬ己の所業と知らされた。そして思つた。

恋い焦がれた彩あやには兄弟の仇として、また、都の太郎貞盛には父の仇として、小次郎は恨みを受けていかねばならぬのかと。

霜月の末。季節は巡り、都から帰郷してほぼ一年が経過しようとする。

る盛夏の頃。鎌輪の馬場では、伏せた村雨ライガーの背にレインボージャークが乗つて戯れていた。時折仰向けになつて、前肢で董色の孔雀を追い立てる。レインボージャークもその度浮上し、村雨ライガーノ脚が届くぎりぎりの高さに留まると、両脚で村雨のカウルブレード（＝鬚）に飛び乗る。2機の鋼鉄の獣が無邪気にじやれ合う姿は、それが強大な破壊力を持つ金属生命体とは思えぬ程、長閑な光景であった。

合戦での勝利以来、小次郎の元には逃散していた農民や、新たに領地の寄進を申し出る者が集まることが相次ぎ、以前にも増して活況を呈していた。初夏に植えられた稻の生育も順調で、遠方に広がる水田は日に日に緑を深めている。荒廃していた館の補修も終わり、ジエネレーターからのレッゲルの補給も確保され、ゾイド達にとつても立派な整備場が設置された。そして更なる慶事を、小次郎は心待ちにしていた。

奥の間から嬢^{おうな}が現れる。いつになく忙しない様子の小次郎が問う。
「どうだ、ばば様」

地元の百姓で、多くの子をとりあげて来た嬢が目尻に皺を寄せた。
「おめでとうございます、お館様。女子にて御座います」

小次郎は喜びを爆発させた。声にならない声が回廊から響く。馬場で戯っていた村雨ライガーも、主の今までに聞いたことの無い歓声に動きを止め、勢い余つて飛びこんできたレインボージャークに強^{したた}かに頭を打ち付けられ呻き声をあげた。

嬢の後ろから、両手を灌ぎ嬢の手伝いを終えた桔梗が現れる。

「私からも申し上げます。おめでとうございます」

「孝子、俺からも礼を言いたい。ありがとう」

小次郎は桔梗の両手を取り、上下に大袈裟に振った。無垢な喜びの仕種に、桔梗は胸の内に喜びと寂しさの複雑な感情を抱いていた。（こんなに喜ぶなんて。まるで自分が子どもになつたみたい）

想い人が、別の愛する女性の子を授かる。それは自分にとつて残酷にも思える。だが、想い人はこれほど素直に歓喜している。自分も素直に喜ばねばならないのだと、心の中で何度も言い聞かせた。

周囲から一斉に祝いの言葉が投げ掛けられる。

「兄者、おめでとうございます」

「殿、やりましたな」

「いや、めでたい。めでたいですな」

将頼が、将平が、員経が、そして何人もの郎党達が駆け寄ってきた。雰囲気を察した村雨ライガーも、姿勢を正して座り込み、小次郎を見つめる。

「村雨よ、良子に御子が授かつたぞ。お前も仲良くしてやつてくれ。もつとも、良子のようなじやじや馬姫になつたら厄介だな」

「聞こえておりますよ」

背後から、嬰児を抱いた良子が静かに近づいていた。不意を突かれ動転する。

「お前、もう起きていいのか」

母となつた良子は、少し眼つきを険しくして呟く。

「私はじやじや馬でござりますから。折角御子をお連れしたのに、お見せするは止めにしましようか」

立ち上がつた小次郎は頻りに良子を宥め賺し、良子はわざと背を向け、抱いた子を隠す。

「許せ良子。俺にも抱かせてくれ。案ずるな、弟達を何度も世話をした。

——おお、軽いのう。まだ目も開かぬ故どちらに似たかもわからぬが、まずは元気な女子だ。なんだ、村雨も見たいのか。よし、そこに座れ。いいか、これが俺の子だ。よく見るがいい。

良子。ありがとう」

慎重な歩みで寄つて来た村雨ライガーに子を示すと、低く唸り声を上げ、それがゾイドなりの祝いであることがわかる。

終わりに新しい父親は、新しい母親に向い札を言つていた。良子はこれまで以上に温和な瞳で夫を見つめる。

「この子はあなた様と私の血と共に受け継いだ娘。きっと健やかに育つてくれるでしょう。それ故にじやじや馬になるのも無理からぬことございましょうが」

皆がどつと笑った。小次郎も良子も笑った。レインボージャークが甲高く啼いた。

桔梗も笑つたが、心の中で拭いきれない何かがカラカラと音をたてていた。

ゾイドが接近している。

息を潜め、光学迷彩で姿を消したゾイドが。

ヘルキャットが鎌輪の館に突如として姿を現したのは、娘誕生の日の夕刻であった。単機で来訪した事と、館の全員が浮かれ気味であった事が、警戒網の解れを生んだといえる。

良正の花押の入つた書簡をうやうやしく届けると、ヘルキャットは一直線に南に向かつて走り去つて行つた。

もたら齎された書簡は所謂「挑戦状」であつた。

小次郎も遠からずと覚悟を決めていたことではあるが、好事魔多しの理の如く、事態は急変し、書面を掴む小次郎の掌に汗が滲んだ。書面には、良正が再編した兵を上野から率いて、鎌輪の南、子飼川の濫流に挟まれた川曲村に陣を張り、雪辱を挑むとある。

「やはり戦は避けられぬか。早急に評定を開く。皆を集めよ」

館は忽ち緊迫した雰囲気に包まれた。

小次郎は兵力配置図を前にして腰を下ろす。

「兄者、何故に良正叔父は上野より川曲村に向かつたのでしょうか。水守の館とは正反対ですが」

「俺の予測に過ぎぬが、水守もやはり荒らされ補給も叶わぬはず。源家も石田にも頼れぬとなれば、今度は良兼叔父に助力を請うたはずだ。良兼叔父が服織から難を逃れ、所領である上野に戻つたとすれば合点も行く」

「では、今度こそダークホーン部隊が参戦するのでしょうか」

「慌てるな三郎。国香伯父が出陣した野本の合戦にさえ、良兼の長子公雅のみの参戦だった。今度も安易に参戦するとは思えぬ。上野から来たのは、良兼叔父に託けた、ただの虚偽^{かこつけ}こけ脅しに思えるのだ。眞経はどう思う」

「私も殿と同じ考えです。ただ、レツゲルと弾薬程度の施しは受けて

いるものと。源家の残存部隊が随伴している可能性はありますが、三兄弟の竜を失った今、大型ゾイドは皆無でしょう

「厄介なのは手負いのアイスブレーザーのみか。相分かつた。四郎を呼べ。玄明に書を認めしたたる」

「兄者、また助力を願うのですか。この前の様に徒に被害を広げることになりませぬか」

「だから伝えておくのだ。ふんやのよしたつ一切手出しさはするな。これは平氏の問題だ」とな。今回は文屋好立殿の力も頼らぬこととする。孝子、戦えるか

小次郎は桔梗を真っ直ぐに見つめる。それは良子に向けられた視線とは違うものだった。自分はどこまでも、優秀なゾイド乗りとして、想い人に思われていることを痛感する。

（それでもいい）

「はい。ソードウルフのままでも充分戦えます。今度は慎重に、穫り入れ前の作物を守るよう戦いましょう」

全員が力強く頷く。

平将門は二度目の戦、『川曲の合戦』に挑む。

第参拾五話

川曲村は、騰波とばノ江の隣に位置する湖沼の大宝沼たいほうと、蛇行する鬼怒川に挟まれた地に位置する。河川の浸食作用によつて形成された段差のある地形が開拓を拒み、丘陵と低木地が続く荒れ地のまま委棄されていた。三郎が敵陣を見渡し告げる。

「良正叔父も考えましたな。この地形では疾風ライガーの高速性が生かせません。比べて敵はカノントータス部隊を引き連れて來た。砲撃戦で挑むつもりでしようか」

「叔父とて大虚うつけではあるまいが、あの陣形では到底我らに敵うはずもない事はわかるだろう。別に何か策があるのか。三郎、敵の布陣と機種を知らせろ」

ケーニッヒウルフが三連スナイパースコープを装着した。小次郎達の操作盤画面に、次々と認識された機種が示されていく。ある機種を判別した折り、三郎が声を上げる。

「兄上、『ブラストルタイガー』というゾイドを御存知か」
その名を聞いた瞬間に理解した。

「殿、あの虎は」

デイベイソンが機体を村雨ライガーの脇に進め、操縦席の伊和員経いわのかずつねが小次郎と視線を合わせる。

「太郎だ」

父国香の雪辱を晴らすため、ソラの都から下向して來たに違いない。良正の本当の目的は、この戦いに平貞盛を担ぎ出すことであつたのだ。

ヘルキヤットに乗る平良正の上兵が、宣戦を告げる牒を携え進み出ると同時に、デイベイソンが受け取りへと向かう。次には矢合わせが交わされるはずであるが、今回の牒には鏃やじりが二双に別れた雁股かりまたが副えられていた。一騎打ちを申し込む合図である。

軍団の前にアイスブレーザーが進み出る。希少なアイスマタル装甲の修繕は無く、右のヘルブレイザーと安定翼も失われたまだ。小次郎は村雨ライガーを先頭に立てた。

「良正叔父、一騎打ち受けて立ちます。ですがこれ以上道理に適わぬ戦はお止め下さい。悪戯に民を苦しめるだけです」

鎗割れた頭部アイスマタル装甲の天蓋を開き良正が叫ぶ。

「何を以て道理を語る。貴様の為に常陸は大いなる災厄を被つたのだ。潔く負けを認め、速やかに鎌輪に戻れ」

自らの責任が一切感じられない返答であつた。「話し合つても無駄だ」。小次郎はただ復讐のみに身を賣つした者の哀れを覚えていた。

「よく見ろ。後方には貴様に殺された兄国香の長子、左馬允平太郎貞盛も控えている。それでも戦うのか」

「無論」

即答であつた。

「叔父上、太郎を担ぎ出してまでこの平将門を惑わせようとは御見苦しい。さあ、早々に始めましょうぞ」

気持ちを傾けない者に説得など通じない。小次郎は風防を閉じムラサメブレードを開いた。アイスマルチフレーバーもハイパーオトン粒子砲を構える。対峙の後、先に飛んだのは村雨ライガーであった。息をつかせぬ速さでストライクレーザークロールを叩き込む。粒子砲の充填に間に合わない黒い猟犬は、後頭部を叩かれ前肢を折つてのめり込む。一騎打ちの勝負は付いていた。

一斉に砲声が轟く。カノントータスの砲撃が始まった。炸裂する突撃砲の硝煙に紛れて、アイスマルチフレーバーは再び離脱していく。止めを刺すことができたが、小次郎の中で、国香に続き良正までも討ち取ることに躊躇いが生じ、追撃することができなかつた。

鎌輪の軍は正面に伊和員経のデイバイソンを立てて雪崩れ込む。カノントータスの砲弾が降り注ぐ中、四肢を開き盛り上がつた背中の十七門突撃砲を構えた。

「メガロマックスを放ちます。五郎殿、宜しいか」

この戦にも、五郎将文を後方警戒・対空要員席に伴つていた。

「至近弾多数、交叉射撃により敵の命中精度が上がっています」

「ならばその前に破壊するまで」

表示盤に標的が捕捉され、十七の砲身が無作為に作動した後固定す

る。

「速攻で決めます。小口径四連バズーカの発射を頼みます」

【承知】

焰の花が放たれた。17の光の筋に更に4本が加わり、計21本の光芒が敵陣に降り注ぐ。火力でも圧倒していた鎌輪勢は、瞬時に水守勢を沈黙させた。

「斬り込むぞ、俺に続け」

怒濤を打つて雪崩れ込む村雨ライガーに、敵は忽ち総崩れとなる。

戦いは一方的であつた。高速は生かせないものの、接近戦で威力を発揮する村雨ライガーやソードウルフの前に水守勢は悉く打ち破られていく。

残つたのは切り刻まれるか仰向けになつて四肢をばたつかせる力ノントータスの群れであつた。

「三郎、プラストルタイガーはどうした」

“アイスブレーザーとともに既に離脱した模様。戦闘に参加した形跡もありません。貞盛は兄者と戦いたくないので”

そうかもしれない。そしてそれは小次郎とて同じであつた。

川曲村の合戦は、平将門の一方的な勝利に終わつた。良正は源護から与えられた水守の軍団を完全に失い、従類も伴類も全て敗走し壊滅した。残存部隊はそのまま上野の平良兼の館に逃げ込み傘下に置かれることとなる。その中には、手負いのアイスブレーザーと、一発の弾丸も撃つことの無かつたプラストルタイガーも含まれていた。

野本と川曲の二度の合戦に於いて勝利を掴んだ平小次郎将門の声望は一気に高まり、増え下総には伴類を含めた武士と逃散していた農民、そして独立系自営農民の寄進が進み、坂東での一大勢力へと成長していく。

己が望まぬにも拘らず、平将門は否応なしに歴史の表舞台へと担ぎ出されようとしていた。

第参拾六話

刈り入れを終えた水田の畝と土手一面に、曼珠沙華が夜風に揺れていた。

篝火に照らされた茅の輪の向こう側、例年には豊作の人々は歓喜に酔い痴れる。

その夜は収穫の祭りである。館主として出向かねばならぬ小次郎は、妻と幼い娘、そして當所警護の伊和員経を残し、村社の境内に三郎将頼と桔梗を伴つて参内していた。

境内に近づくにつれ、碧い獅子も炎に染め上げられていく。続く剣狼と王狼も同じ色に染まっていた。接近する村雨ライガーの姿を見つけた人々は、小次郎達が降り立つ前に幾重にも人垣をつくり、日々に小次郎を讃する言葉を唱えて出迎えた。

「小次郎様、ありがとうございます。お蔭様で大豊作でございます」「小次郎様がお戻りになられたお蔭で、土地も奪われず、余計な出拳（※稻の強制貸し出し。膨大な利子を取られる）も課せられず、まことに小次郎を讃する言葉を唱えて出迎えたこと

「あたりまえだ。我らの小次郎門様は天下無双、下総に手出しをする受領はおらんよ」

小次郎は含羞みつつ応じる。

「お前達、ちと飲み過ぎておるぞ。もう出来上がつていいではないか」
前に跪く数人の百姓衆（＝農業従事者、及び林業、鳥羽の淡海での漁場従事者を含む）は、赤ら顔に笑顔を湛えて畏まる。

「御無礼があれば平に御容赦を。ただ、今年の出来は誰のお蔭でもなく、他ならぬ小次郎様のお蔭です。のう、皆の衆」

オウ！ という小次郎を讃える歓声が一斉に上がつた。気恥ずかしくもあり、小次郎は奥の社に向かつて早足に進んで行つた。

「兄者、皆喜んでおりますな。村雨ライガーやディバイソン、そして孝子殿のソードウルフも田興しや導水に駆け回りましたからな。ジェネレーターの生長も順調。漁撈民も満足であろうて」

「いや、俺がどうこうしたわけではない。全ては百姓衆自らの努力の

賜物だ

傍らで桜色の袖で口許を押さえ、桔梗が笑う。身に纏う真新しい壺装束は、またも員経が与えたものであった。

「御謙遜をされずとも宜しいのではありませんか。殿が命を懸けて戦つたことで、この下総が守られたのですから」

本堂の縁側に腰を降すと、酒と盃を持った百姓衆が続々とやつて来る。

「小次郎様、どうか御一献」

「三郎様も是非」

「孝子様も如何でしようか」

茅の輪の向こうの村雨ライガーにも、何人かの百姓衆が集まり感謝の踊りを捧げているのだが、鋼鉄の獅子は迷惑そうに頻りに首を振つていた。

ふと見ると、社の角の影で若い娘たちが三人を覗き込んでいる。三郎が横目で小次郎を見ながら呟いた。

「兄者、そろそろ私を慕う娘達が集まつて來たようですね」

「さあて、どうかな」

盃を次々と干しながらも、小次郎は淡々と答えた。

「お出ましのようだぞ」

3人の年頃の娘が駆け寄つて來た。一頻り館主小次郎への挨拶を済ませた後、顔を見合せ何かを言おうとしている。三郎が声をかけた。

「娘御達よ、言いたいことがあれば何なりと申せ。今宵は祭りだ」

その言葉に意を決し、娘の一人が声を上げた。

「孝子様、御無礼とは存じますが、その凜々しき御姿、是非とも近くで拝顔させてください」

「え？」

怪訝な顔をする桔梗と、期待が転じて肩透かしを食らつた三郎が対照的な表情を成した。

「三郎さまのお許しが下りてゐる故申し上げます。私達若き女子の間では、孝子様に皆憧れております。普段は射干玉の黒髪を靡かせ、お

館様に健気に御助力なさる姿は何より美しうござります。その上ゾイドに乗つてはお館様にも負けない程の御活躍。なぜそのように美しい程凛々しく戦うことができるのでしょうか。本当に羨ましい限りでござります」

「三郎、残念だつたな」

呆然と娘を見つめる三郎の背中を思いきり叩くと、失意の弟は前めりに倒れ込んだ。

「兄者、酷いではありませんか」

掌の土埃を払つて立ち上がる三郎に、小次郎は豪快に笑つた。

「孝子、お主を慕つてゐる娘達だ。共に語つてやれば良い」

桔梗の背中も小次郎が押した。三郎同様に押し出された桔梗は、娘達の前に立ち上がる。娘達の潤んだ瞳に見つめられ、どんな対応をしてよいか当惑していた。桔梗は少し振り向き、それに応えて小次郎が頷く。

「何をお話すれば良いのでしようか」

「こちらにお越しください。みんな、孝子様よ!」

娘の一人が大きく手招きをすると、社の影から大勢の娘達が一斉に飛び出し桔梗を取り囲んだ。

「ゾイドを操るのは難しくありませんか」

「ソードウルフの剣はどれほど鋭いのですか」

「その美しい髪はどの様にお手入れをされておられるのですか……」

不貞腐れて座り込む三郎を励ましつつ、小次郎はまた高らかに笑つた。

「あの年頃の娘は、孝子の様な勇ましい女に憧れるものなのかな」「知りません。どうせ私など……」

嬌声を上げて桔梗の周りに集う娘を尻目に三郎が洩らした。

「そういえば、四郎から話は聞きましたか」

「何をだ。一昨日から景行公の元へ行つてしまつて会つてはおらぬが」

頬杖をつき、茅の輪の奥のケーニッヒウルフを見ながら三郎がぼそぼそと語り出す。

「その景行公からの伝言だそうで。源護と良兼叔父とが、都に追捕状を請願したとの話です」

盃を運ぶ手が止まる。

「追捕状、我らへのか」

「何分源家は朝廷との繋がりもあり、仮にも常陸の元国司です。そのうえ下向してきた貞盛が加わっているとすれば、武力に訴えられない分自分達に都合の良い事実ばかりを並べ立て、公儀によつて我らを裁く心算なのでしよう。

まだ請願を提出したかどうかはわかりませんが、我らも早めに対策を講じた方が良いやも知れません」

百姓衆の上げる雜踏の中でも、三郎の語る声は小次郎の心中を抉つて行つた。

追捕官符が認められれば、小次郎達は朝廷に仇為す反逆者（叛逆）と見做されてしまう。事態は一刻を争う。明日の早々にも、弁明の書状を携えて出立する必要もあるだろう。

「三郎、野本での戦の記録は纏めてあるな。それと、レインボージャークは飛べるか」

頬杖を解き、小次郎に向直る。

「ケーニッヒウルフの記録より移してあります。準備は何時でも。レインボージャークも今のところ健常ではありますが、あれを動かせるのはまだ義姉上と兄者のみですぞ」

「俺はレインボージャークで一足先に都に向かう。後からお前が村雨ライガード、員経と共に入京してはくれぬか」

「滅相もない。都など苦手ですか」

間髪を入れず三郎は首を横に振つた。確かに三郎には荷が重すぎる氣もした。雜踏の中、あの人気^{ひとけ}に噎^むせ返る光景を思い出す。

「孝子と員経を伴いたいのだが。お前だけで万一を乗り越えられるか」

暫しの思案の後、三郎が顔を上げる。

「文屋好立殿と、多治経明殿に協力を願いましょう。更には藤原玄明殿にも声を掛けておいてください。容易に鎌輪には手出しも出来ぬ

と思います。如何でしようか兄者」

苦肉の策とも言えたが、手堅くもある。ランスタッフの一群が館の周囲を遊弋していれば、充分示威にもなるだろう。小次郎は力強く頷くと、酒の注がれた盃を高らかに上げて叫んだ。

「今宵は宴だ。思う存分楽しむがいい！」

再び歓声が上がった。その声の背景に、平将門自身の決意が込められていることを知る者は少ない。

第参拾七話

鎌輪の館の馬場に、濛々たる土煙が舞い上がる。

碧い獅子と、董色の孔雀が激しく暴れている。一頬り嘶いた後、中から汗だくなつた伊和員経と小次郎が降り立つた。ゾイドの激しい振動に揺られ、足取りも覚束ないほどに疲労していた。

「殿、私には村雨は扱えませぬ」

「俺もレインボージャークを手懐けるにはまだ苦労しそうだ」

屋敷の縁に腰を下ろすと、茶を運んで来た良子が二人の間の床に膝を着く。

「御無理をなさらぬように。あなた様、何なれば私がレインボー ジャークを操り都に上ります」

「ならぬならぬ。あんな所にお前を行かせるわけにはいかん。第一、多岐はどうするのだ」

傍らには、愛らしい乳飲み子が座っている。母の膝に這い上がると、拙い指先で小次郎を指差し屈託の無い笑顔を輝かせていた。

「良正叔父が、あれで諦めるとは思えぬ」

小次郎は未だに憤る獅子と孔雀のゾイドを前に、額の汗を拭いつつ二匹を見上げる。

「村雨にせよ、レインボージャークにせよ、いつ迄も俺や良子だけしか操れぬのでは役に立たん。少しづつも慣れさせねば、これから戦に備えることは出来ん」

多岐を膝に抱いた良子は、不安そうな顔で小次郎を見つめた。
「やはり、父は攻めて来るのでしょうか」

茶を少し口に含み、小次郎は空を見ながら答える。

「義父上にせよ、良正叔父にせよ坂東武者だ。源護の動きも怪しい上に、太郎貞盛も加わっている以上、私に国香伯父を討たれた雪辱を必ず果たしに来る。それまでに、手持ちのゾイドを全て手懐けておきたいと思つたのだが」

深い溜息をついて、漸く員経が話に加わる。

「気になる上総と常陸との国境には、現在孝子が好立殿と物見をして

おります。程無く報告がくることかと……どうやら噂をすれば
土壙と館を隔てる矢倉が消魂^{けたたま}しく開門告げ、サビンガを背負つたまま剣狼が雪崩れ込んで来た。厩^{うまや}に下がつた村雨ライガーとレインボージャークも、ソードウルフの鬼気迫る姿に興奮し身を震わせ、多岐は恐怖のあまり泣き出した。

只ならぬ様子に、小次郎は良子と娘を館奥に下がるよう命じ、員経と共にソードウルフ頭部脇に駆けつける。昇降機の到着がもどかしいのか、桔梗は風防を開くと、ひらり、と木の葉が舞うが如く地表に降り立つた。

「良兼軍が、水守に向かつて結集しております」

第一声は、剣狼達の蒼然たる姿を納得させるに足る報告であった。遅れて昇降機を伝い降り立つた文屋好立が、息を切らして補足する。「上総にあつた良兼本来の所領の従類と、常陸の源家の残存部隊、水守の小勢に加え、国香亡き後を襲つた貞盛繁盛兄弟を併せた部隊が、下総の境^{さかい}目指して進撃を開始しております。

途中ゆるゆると進み伴類を募り、兵力は次第に拡大。私怨を晴らす為との理由で国衙の禁圧さえ無視したことです」

そこまで言うと、好立は俯き肩で息をする。強張つた表情のままの桔梗が、員経と小次郎を代わる代わる見つめた。

「孝子、上総勢の兵力はどうだ」

「ゾイドにして凡そ二百。猶も増加中です」

「員経、いま集められる兵力は如何程か」

「先の勝戦^{かちいくさ}以降、我らに味方する伴類ゾイドは数十を越えます」

「烏合の衆では役に立たぬ。至急、各頭領に檄を飛ばし、毅を成して備えを整えよ。良き返答をせぬ者は當てにするな、寝返られるだけだ。
たたら鉢^{かづき}衆にはリーオの鎌、刃、具足を鍛えさせ兵具の調達を。

四郎を呼べ、參集する武士達の名簿を作成させゾイドの機種による編制と配置を考える。

孝子、確認するが義父殿の主力はダークホーンでいいのだな」

「先に野本に出陣した機体らしきものと、他上総棟梁のゾイドらしきものが2機、加えて手負いのアイスブレーザー、貞盛のブラストルタ

イガー。無数のレオブレイズとウネンラギアを見受けました」

典型的な寄せ集め、烏合の衆だ。

報告を聞きつつ、小次郎は心中安堵していた。編制が混迷している。察するところ良兼に無理強いされて寄せ集められた軍団なのだろう。だが油断は禁物だ。

小次郎は考えを口に出すことなく、未だ猛々しく機体を揺さぶる村雨ライガーを括目した。

「頼むぞ、村雨ライガー」

碧き獅子の双眸は、主あるじを真つ直ぐ見据えていた。

上総の軍勢けい平良兼の軍が鬼怒けぬの濫流の畔、下野・常陸、そして下総の境に姿を現したのは、ほぼひと月以上も過ぎてからのことである。

小次郎の予測した通り、続々と結集する伴類の編制に時を費やしたというのは表向きの理由だが、義父良兼にしてみれば甥の小次郎と事を構えること以上に、娘である良子の夫との軋轢きみづらを避けたかったに違いない。父のダークホーンに随伴する良子の弟公雅きみまさ、公連きみつらも、そしてプラスストルタイガー操る平太郎貞盛も思いは同じである。ただ一人、手負いのアイスブレーザーの操縦席で氣炎を吐く平良正のみが、小次郎への恨み言を唱えていた。

「おのれ小次郎、甥の分際で散々我に恥をかかせたな……」

下野国府より翼たつみの方位、結城法城寺を望む平原に、私闘としては稀に見るゾイドの大軍団が、下総鎌輪を睨んで結集した。

寒風吹き荒ぶ葉月の空の下、平将門は三度目の戦いくさ、『下野国府の戦い』に挑むのだつた。

第参拾八話

払暁。微かに赤みを帯びていく海原の上の星空に、波に洗われるが如く光の柱^(ライトピラー)が数本立ち上がつていてる。

「篝星は凶兆と都の星見共^(ほしみ)がぬかしていたが、今度ばかりは奴らの予見が的中したのかもしれぬな」

ダークネシオスの開いた背甲防水隔壁から身を乗り出した純友は、拱手した姿勢で光の柱を凝視してた。

坂東から齎された報せは、彼の野望を激しく搔き立たせていた。

「平将門、遂に兵を挙げ、敵を鎧袖一触せり……か」

海原に昇る太陽の欠片が線を引く。篝星の光の柱は消え、次第に宵闇が追い遣られていく。

純友の元には『野本の戦い』及び『川曲の戦い』に小次郎将門が大勝し、更に現在、下野国府を挟んで上総上野常陸を束ねる平良兼の軍団と一触即発の状況にあること、そしてその戦因が所領と女難の絡みであることまで伝わっていた。朴訥なまでに真っ直ぐな瞳をした男が怒りを爆発させたことに、鋳び付いた時代の歯車が軋みを上げて回転し始めた気がした。

今一度、将門に会つてみたい。

自分の野望を成し遂げる道標として、その坂東武者との再会を熱く念じていた。

「頭、きのあきしげ潜航開始。隔壁閉鎖願います」

紀秋茂が船室奥から、碎ける波涛に抗し声を張り上げる。「相分かつた」と呼応し艇内に滑り込んだ純友の心中は、切なるまでに将門との再会を願う心が渦巻いていた。

晩冬の乾いた大地に濛々たる土煙を上げて、鋼鉄の角を備えた獣が攻め寄せる。ハイブリットバルカンを備えた黒の動く要塞と、石田荘の残存部隊のレッドホーンの混成部隊が、轡^(くつわ)を並べ地響きを轟かせて突進する。待機する村雨ライガーの操縦席から敵陣を俯瞰し、小次郎は思わず感嘆の声を上げていた。

「流石は良兼叔父、見事な陣形だ」

鎌輪勢のゾイド群が主に高速型であることを鑑み、上野の軍は機動性に劣るダークホーンに密集隊形を探らせて来たのだ。

小次郎は、前衛で共に構えるソードウルフを後退させ、唯一機のみ敵前に姿を晒した。低い唸り声が響く。鋼鉄の獣は臆することなく、闘志を滾^{たぎ}らせているのだ。

「行くぞ、村雨ライガー！」

碧い獅子が勇躍する。ハイブリットバルカンの銃身が一斉に回転し、村雨ライガーに火力を集中した。一見無謀な戦法だが、豪雨の如き弾丸の曳光は、全て碧き獅子の後方を穿つばかりであつた。

良兼が密集隊形を選択してきた時点では、小次郎は戦術を変えていた。

圧倒的兵力差を埋めるには、敵兵力を分断し各個撃破するのが定石である。だがそれを見越して敵部隊が編制して來たのであれば、少しでも攪乱させて陣形を崩す他ない。

村雨ライガーが将門の乗機なのは周知であり、将自らが先陣を切つて飛び出せば、必ず攻め方に動搖が生じると踏んだのだ。

小次郎の目論見通り、ダークホーン、レッドホーンの混成部隊は見事に混乱した。ダークホーンのハイブリットバルカンは、本来後方から停止若しくは低速で発射する支援火器である。それをレッドホーンと共にクラッシャー호ーンを突き立て突進したため、高速移動しながらの攻撃では照準を定める事も困難であつた。ましてや通常の高速ゾイド以上の運動性を持つ村雨ライガーを捉えることは不可能であり、混戦の最中忽ち隊形は崩れ去つていった。それは直近に野本、川曲と戦に挑んだばかりの小次郎と、永く官職の介の位に就いて戦への鍛錬を怠つていた良兼との差でもあつた。

小次郎は乱戦に突入しつつも、頻りに良兼の操るダークホーンを捜していた。そして右翼より二機目のダークホーン腹部に、掠れてはいるもののディオハリコン塗料で描かれた二本の帶を目視し、敵将良兼の乗機と確信する。背後に構える味方の布陣の支援砲撃の射角外にいることを確認すると、無線機に鋭く告げた。

「員経、経明、突撃砲撃て！」

後衛に伏していた二機のデイバイソンが同時に立ち上がり、ダークホーンの崩れた群れに十七門突撃砲の砲火を注いだ。ダークホーンにせよレッドホーンにせよ、その重装甲は突撃砲砲弾の直撃を受けても容易に貫かることは無いが、舞い上がった濛々たる砂塵で視界を遮られた。

白刃が煌めく。

ガシャツ、という金属の塊が落下する音が響いた。

展開したムラサメブレードが、自機の最も近くにいたダークホーンのハイブリットバルカンを基部ごと切断したのだ。有り余るゾイドコアの熱量を放熱する為か、碧き獅子の鬣が黄金色に輝いている。鬼神の如き碧き獅子の形相に、上総と繋がりの薄い伴類のゾイドが這う這うの体で逃げ去って行つた。

戦いつつ、小次郎は野本の戦の憂いを思案していた。非は相手にあり、知らぬとはいえ、常陸の伯父国香を殺してしまつた。今回の戦の相手も血族であり、義父である良兼を討つことは、妻良子にとつてもどれほどの痛みを強いることであろうかと。多岐という初孫が生まれ、祖父として孫の顔を見て、そのあどけない体を腕に抱きたいと願うのが人の情ではないか。

傷つけたくない。

後方からソードウルフと二機のデイバイソンが攻め上がる。ダブルハックソードを閃かせる剣狼は、そんな小次郎の迷いを断ち切る如く敵のウネンラギアを薙ぎ払つた。

「まずは御身をお守りください」

桔梗の声が操縦席に鳴り響く。我に返つて正面を凝視すると、眼前にアイスブレーザーが接近していた。

骨肉の争い。同族相争う虚しさ。

「良正叔父、未だに仇為す御積りか」

答えが返るはずもないと判つてゐる。小次郎の叫びは憂いを帶びていた。

第参拾九話

ヘルブレイザーとムラサメソードが火花を散らし斬り結ぶ。体格に勝る村雨ライガーに、アイスブレーザーがヘルウイングを昆虫の飛翔翅の如く展開し、間合いを取つて着地する。村雨ライガーを上回る優速を生かし、執拗に斬りかかる黒い獵犬を受け止めつつ、小次郎はじりじりと部隊を進めて行つた。

小次郎は、敵の陣形が次第に下野国府を背にして集結していく様子に気付いていた。

(叔父達の目論見はこれだつたのか)

攻め手である小次郎達のゾイドが、流れ弾によつて背後の国府を損なえば、ソラノヒト天上人への逆賊と見做され揺るがぬ追捕の理由となる。戦術では敵わぬと見て、老猾な戦略を取り鎌輪勢を陥れようとしているのだと看破した。

「員経、経明、デイバイソンの射角に留意せよ。国府に当ててはならん」

強力な破壊力を持つ十七門突撃砲の射撃を抑えると同時に、その伝達により敵の真意を味方勢にも知らしめた。兄の言葉を理解した三郎のケーニッヒウルフは、国府の土壙とは平行となる射撃に移行する。高い貫通力を誇るスナイパー・ライフルが、猶も数機のブロツクスゾイドを貫き国府の堀に残骸を叩き込む。既に開戦当初から上野勢より數十余りの伴類が抜け出し、一部は恥ずかしげもなく小次郎の後衛に付こうとまでしている。

突然、抜け出したブロツクスゾイドが切斷されごろごろと転がつた。白刃の如きフェザーカツターを煌めかせ、董色の孔雀が舞つている。

「良子、なぜ来た」

怒号とも狼狽とも取れる声で小次郎が叫ぶ。

“あなた様、これは私と父との業でもあるのです。妻として夫の言いつけを破つた事、言い訳などしません。ですが私は私の心を示すことで、父との確執に決着をつけたい。どうか、どうか、お許しください

い』

操る者の決意を汲み取るかの様に、甲高くレインボージャークが啼く。

(所詮は同じ血を受け継ぐ者、良子とて坂東の女なのだ)

「二度と出過ぎた真似はするな。だが来てしまったものは止むを得まい。良子、良兼叔父のダークホーンを搜せ。出来れば包囲し捕獲する、良いな」

『はい』

応じる声に安堵の気持ちを読み取る。夫が、父を討つつもりの無い事を聞いたからだろう。村雨ライガーの直上を舞うレインボージャークの尾羽が、太陽光を透かして旋回していた。

戦況が僅かな切っ掛けによつて激変するのは常である。上野勢の後陣で部隊が崩壊を始めた。先頭を切つて走るのは、黒い虎型ゾイドであつた。

「太郎、逃げるのか」

しかし、口をついて出た言葉とは裏腹に、小次郎も又心中で安堵していた。竹馬の友と言える従兄貞盛を討つのもまた、小次郎の本意ではなかつたからだ。

『あなた様、ダークホーンが国府青竜門に殺到して行きます』

そんな良子の報告を聞くまでもなく、敵陣は完全に崩れて行つた。

一度崩れた部隊は止め処なく崩壊し、一斉に国府に向かつて雪崩れ込む。固く閉門していた扉を突き崩し、ダークホーンが、レッドホーンが、ジークドーベルが、そしてプラストルタイガーが我先に国府敷地内に入り込んで行く。打ち破られた門扉の裏側に、パイルバンカーを装備した国府警護のゴドスが二機倒れていた。

「叔父の部隊を逃がすな。北門は俺が守る、東門に孝子と三郎、残りは南門だ」

剣狼王狼の二匹の狼が駆け抜ける。経明のディバイソンは味方の伴類を引き連れ南門に向つた。泥に塗れ、硝煙の匂いが染みつき、国府を包囲するにも喘ぎながら走るゾイドの姿は満身創痍と言うに等しいものであつた。だが、圧倒的兵力差にも関わらず、鎌輪勢はほぼ

無傷のままであった。

一方、広大な敷地を有する下野国府の官人達は、降つて湧いた災いに戦々恐々とする。雪崩れ込んだ上総勢を退去させる兵威はなく、そして鎌輪勢を防ぐ兵力は更にない。平将門率いるゾイドが常陸石田荘を完全破壊したのは坂東各地でも記憶に残っている。同種の攻撃を受けければ、満足な警護のゾイドを持たぬ国府など一溜りも無い。天上人への叛逆が容易に為されぬものとは知りつつも、坂東の無賴と思われる平将門を前に、国司以下多くの官吏は震えあがっていた。

玄武の描かれた北門に村雨ライガーが差し掛かり、既にそこが伴類によつて充分に閉ざされていることを確認すると、小次郎は、主君の意を察して逸早く西門を固めていた伊和員経のデイバイソンの元へと向かつた。

鋼鉄の猛牛が、超硬角を怒らせて西門を睨んでいる。村雨ライガーを寄せ、風防を開いた。

「西門を開くぞ」

「今、何と仰られた」

聞き取れたからこそに、員経は納得の出来ない表情で問い合わせる。だが小次郎が嘆息をつくと、忠実な上兵は瞬時に主君の心情を理解していた。

「義父ちち上じょうでありますたな」

「そういうことだ。退くぞ」

小次郎に呼応し、デイバイソンが西門の前から去つて行く。目溢めこぼしを狙つて群がつていた味方伴類ゾイドを追い立てつつ、村雨ライガーとデイバイソンは西門の前から全ての手勢を撤退させていった。

国府内から外の様子を覗つていた上野勢に、西門の囲みが解かれたことは電撃の如く伝わり、西門から我先に脱出する部隊が相次ぐ。その中には、他ならぬ良兼のダークホーンや良正のアイスブレーザー、貞盛のブラストルタイガーも含んでいた。

上野勢が去つて数刻した後、正式に手順を踏んで国府に参内した小次郎の眼に入つたものは、無数のゾイドに踏み荒らされた敷地の惨状であった。

「此度も記録は取つてあるな」

デュアルスコープを跳ね上げ三郎が頷く。

「国司に報告するが、事が事だ。四郎と菅原景行公にも御足労を願おう。申し開きは俺がする」

村雨ライガーの風防を上げ、良兼の群が去つて行つた遙か彼方を睨む。

董色の孔雀が舞い降りた。

「あなた様」

良子もそう言つたきり、沈黙した。

『下野国府の戦い』は、三度目にして三度目の圧倒的勝利の元に終決した。これにより厭がおうにも平将門の坂東での名声は高まり、逆に桓武平氏の棟梁たる平良兼の権威は大いに失墜した。まして西門を解かれ甥に見逃されたとあって、屈辱は計り知れない。その屈辱が、形振り構わずの復讐策になるとは、平将門には思い及ばずにいた。

第四拾話

下野国府の戦いより一箇月経過した頃の下總。

丹色の狼がやや速足で駆けていた。

狼の足取りが止まり、空を見上げる。

玻璃の翼を持つゾイドが飛んでいた。

「天空レドラー……ソラの連中が来たんだ」

桔梗は、ソードウルフでの領内巡察からの帰路、鎌輪の館に向かう螺鈿色の飛行ゾイドを目にした。

薄らと航跡を曳いて旋回し、高度を下げ、次第に翼を忙しく羽ばたかせつつ着地点を探っている。

希少種の飛行ゾイド来訪に、鎌輪の館の住人を含め、周囲の百姓衆も一斉に空を見上げた。

その来訪が何を意味するか、桔梗には察しがついていた。

「平小次郎将門を、師走廿九日付にて検非違使序に召喚する」

小次郎を先頭に桔梗を含めた家人が平伏する館の間に、左近衛府番長英保純行の朗々とした声が響く。

筆頭の英保純行と、随行の英保氏立及び宇自加友興両名が齎した藤原忠平名義での太政官符は、予想した如く源護による告訴状であった。

告訴状が出された場合、被告の小次郎も原告の源護も検非違使序に出廷しなければならない。桔梗は小次郎が館を離れることに一抹の不安を感じたが、目に見えて頼もしく成長している五郎将武ら弟達を思い浮かべ、延々と読み続ける官符文面を詠唱の如く聞き流していた。

一通り召喚状を読み上げた英保純行が、畏まる小次郎に声をかける。

「滝口の小次郎将門、これとは別に蔵人頭よりの御伝言がある」

これまでの厳かな口調と異なり私信であることを匂わせる。思わず顔を上げた小次郎が、螺鈿レドラーに反射した光に眩惑され、一瞬目を細める。

「藤原師氏様で御座いますか」

蔵人頭として仕える、摂政忠平の息子の名だ。

「我らが坂東に下向するとの報せを聞き付け、御伝言を頼まれた。『都に上つたら旧交を温めようぞ』と。しかと伝え申したぞ」

「勿体無い御言葉に御座います」

返答する声が僅かに震えている。嘗ての上司が、未だ自分を忘れていなかつた事に感動を覚える、朴訥とした坂東武者の姿がそこにあつた。

通達を終えると、3機の螺鈿色のレドラーは長居することなく飛び立つていった。

次に向かうのは源護の館に相違ない。玻璃の翼を見上げつつ、小次郎は鬱々とした感情を逆巻かせていた。

「出立は何時に」

「明日には出る。三郎、下野の戦の記録を準備しろ。村雨ライガーとディバイソン、そしてソードウルフにレッゲル補充だ。レインボージャークを引き出せ、俺がもう一度やつてみる」

小次郎は再び挑む覚悟だ。何度試みても意の如く操れないゾイドを手懐ける為に。これまでもの打撲や擦り傷の類は何度も負つている。それでも小次郎は繰り返そうとしている。

桔梗は最早居た堪れなくなつた。

「小次郎様」

馬場に引き出された董色の孔雀に向い歩み出した小次郎に、桔梗が駆け寄つた。

「何故にレインボージャークに拘るのですか。海路を使つて上洛しても宜しいでしよう」

小次郎は未だに駄々をこねる幼子のようなゾイドを見つめ、一言ずつ言葉を区切り応える。

「一刻も早く上洛し、身の潔白を示したい。坂東武者には坂東武者の誇りがある。源家三兄弟のこれまでの所業や、叔父上達の不当な領地の略奪行為を露わにし、理は我にあることを正々堂々主張したい。そして申し開きの後すぐに戻る為、レインボージャークが必要なのだ」

桔梗は、歩みを止めない小次郎の横顔を見据えた。意を決して声を上げる。

「操る事はできます、レインボージャークを」

小次郎の歩みが止まる。勢いよく振り返り、桔梗の両肩を強く掴んだ。

「ま」とか

桔梗が頷く。

「略奪したゾイドを従わせるため、その活動を制御できる特殊な装置を所持しています」

「なぜすぐに伝えてくれなかつた。さすれば俺もこんなに苦労をせずともよかつたものを」

増々両手に力が入り、思わず桔梗は顔を顰める。対照的に、小次郎の眼には喜びの感情が満ちていく。

「ゾイド本来の野生的な能力は低下する故、軽々しく供する事を躊躇つておりましたが、これ以上小次郎様が傷つくのは耐えられません。ゾイドに苦痛を与えるものの、是さえ装着すれば、人の操縦を嫌でも受け入れさせることができます」

掴まれた両腕の痛みの為、桔梗は思わず本音を漏らした。

「それに、私が良子様のゾイドを扱うのが心苦しく……」

「何を言うのだ、桔梗らしくもない」

小次郎は桔梗を激しく揺さぶった。まるで豪胆な戦友に接するようだ。

桔梗は心の中で、深い深い溜息をつくのであつた。

「孝子殿、お館様をお願いします」

乳飲み子多岐を抱いた良子が、頭部を思いきり下げたレインボージャークの下で見上げている。母として穏やかな微笑みを手向ける裏で、妻として最愛の夫を別の女性に預ける口惜しさが滲み出ていることに、桔梗は気が付いていた。

「良子、案ずるな。孝子のゾイドの腕は秀逸だ。必ずすぐに戻つてくれる。

員経、主がデイバイソンにて到着するのを一足先に都で待つてい

る。取り敢えず興世王殿の館に伝言を頼むつもりだ』

「須賀家のおおえの大江だいえ彈正藤原重房殿の湖賊と連絡を取り、一刻も早くディバイソンだけでも駆けつけます。殿の御無事をお祈りしております」

廄の中で、村雨ライガーが寂しげな顔をしてレインボージャークを見つめる。

「村雨ライガーよ、暫しの別れだ。俺の留守を頼む」

小次郎の声が聞こえたのだろう。碧き獅子は甘えと悲しみとが絡み合った唸り声を上げる。

「桔梗、頼むぞ」

「はい」

理不尽な想いが駆け巡る。

(なぜ“孝子”的名で呼んでくれぬのだろう。その名は群盜時代の名前に過ぎないのに)

複雑な感情を抱きながら、董色の孔雀は坂東の地を飛び立った。都まで二日の旅路である。長く伸びるレインボービームテイルが日差しを透かし、地に董色の影を落としていた。

第四拾壹話

雲海を抜けたび、フェザーカッターの先端から白い航跡ペーパートレイルが伸びていく。

操縦席の加圧により、小次郎は何度も聴覚に圧迫を覚え、その都度耳抜きの為に鼻を摘まむ。前を見れば、操縦桿を握る桔梗は身動きもしない。

(俺は空飛ぶゾイドなど乗つたことはないからな)

ゾイドを狩る群盗として、飛行ゾイドも操つて来たのだろう。無言で進路を見つめる華奢な背中に、絶対の自信が感じられた。

検非違使庁に参内することは、世辞にも弁が立つとは呼べない小次郎にとつて気が重かった。加えて、都は嫌な思い出が残る場所である。

早々に訴訟を終え、坂東に戻りたい。

愛機村雨ライガーと離れ、制御装置を組み込み無理やりレインボージャークを動かしてまで都に向かつたのは、小次郎がそれほどまで早々の帰郷を願つたからである。

しかし歴史は、人の想いなど無慈悲に踏み躡るのであつた。

災厄は前触れもなく飛来する。

二人は、風防越しに頭上が異様に明るくなることに気付いた。

突然、目も眩む閃光を放つ大火球がレインボージャークを追い越す。

「なんだあれは」

小次郎は思わず声を上げた。直後に激しい衝撃波が機体を襲う。機体異常を示す警報が鳴り響く。

天井の風景が目まぐるしく回転した。董色の孔雀は忽ち錐揉み状態に陥る。

桔梗は機体の水平を保とうと操縦桿に必死にしがみ付く。数度の横回転を経て、安定を取り戻した機体の風防越しに見えたのは、天空に残る二筋の巨大な永続痕であった。

二人は期せずして同じ言葉を発する。

「……『神々の怒り』」

この惑星に栄えた高度な文明と社会を根こそぎ破壊した、宇宙からの災厄の呼び名であつた。

レインボージャークの進路を横切つて飛來した隕石は、『神々の怒り』に連なる、軌道を乱された小惑星の破片である。

「あの方角は、都です」

錐揉みによつて方向感覚を失つてゐる小次郎には、桔梗の言う方角が正しいのかはわからない。

「そうなのか」

「はい」

漸く安定飛行に戻つたレインボージャークの中、不吉の前兆の様な白い痕を、二人は身動きもせずに睨んでいた。

ぼろぼろの衣を纏つた一人の乞食僧が、飛來する隕石雨を見上げて口遊んだ。

「——極楽は はるけきほどと 聞きしかど つとめていたる ところなりけり——

平将門とはいかなる武者か。一度、面を合せてみしようぞ」

鹿の角を付けた錫杖を持つと、僧は天空に伸びる軌道エレベーターの麓に向い歩を進めて行く。目深に被つた破れた編み笠の奥、僧侶には似つかわしくない鋭い眼光が浮かんでいた。

桔梗の予測は半ば的中した。

大気圏を通過した直径4丈（約13m）程の石鉄隕石は、落下の途中大気の摩擦熱によつて破碎され、数百の破片となつて海域を含む都周辺に降り注いだ。

幸いにして、建設途中の軌道エレベーター施設に直接の被害はなかつたものの、大気の摩擦による衝撃波は文字通り都全体を揺るがす。そしてそれは、今しも上洛する坂東武者と同一視されたのだ。

平将門が破竹の勢いで坂東で名を馳せていることは都にも鳴り響いていた。閉塞した藤原政権への皮肉も込めて、諸氏の間でも小次郎を絶賛する声は上がつていた。その上洛に伴い飛來した宇宙からの侵入物は、恰も小次郎を召喚した檢非違使庁、そしてそれを統括する

太政大臣藤原忠平への神の怒りに違いない、と声高に唱える人々が巷に溢れ出したのだ。

「平将門には八幡大菩薩が憑いている」

「いや、将門に憑いているのは火雷天神道真公の御靈だ」

「流星であれば、北辰の妙見菩薩に違いない」

噂の背後には、都の大衆の動搖を画策する藤原純友配下の傀儡衆の煽動もあつたが、それは純友の思惑をも遙かに越えて瞬く間に都に広がつて行つた。

——もし平将門を追捕すれば、その祟りは天空を揺るがし、再び『神々の怒り』を引き起こすのではないか。

大衆と、そして慣習に縛られ硬直化した公卿も、上洛する坂東武者に畏敬と戦慄を抱く。そしてその内部では、早々に小次郎への恩赦の手段を講じる論議が湧き上がつてきたのである。

一日遅れでアースポートに到着したレインボージャークは、小次郎達が驚くほどの熱狂的な歓迎を受けた。それは藤原忠平がギルドラゴンを持つて下向した時にも勝る賑わいである。事情の呑み込めない小次郎は、出迎えた中、唯一見知った顔の人物に駆け寄つた。

「興世王殿、一体これは何の騒ぎで御座いますか。私たちの他に、誰が御到着されるのですか」

「そなたは相も変わらず朴念仁よのう。これは他ならぬそなたへの歓迎の宴だ。坂東の勇者、平小次郎将門殿へのな」

まるで我が事の如く語る興世王を前に、小次郎と桔梗はただ立ち竦む。

桔梗の予測のもう半分は、大きく外れた。

平将門は、都の民の大歓迎を受けることとなる。

第四拾式話

検非違使別当を始め、佐、大尉、少尉、大志、少志、府生全員が左検非違使庁の庁内に揃うのは異例中の異例であつた。高圧的な態度を取ろうとしても、何処か小次郎に対する畏れがあるのか視線が泳いでいる。陣定じんさだめという公卿会議で作成された問注記と、下野国府より送付された事発日記（＝実況見分調書）に目を落とした別当は、決して小次郎と視線を合そうとはしなかつた。

検非違使庁長官にとつて幸いであつたのは、小次郎が持参したケーニッヒウルフが撮影した映像であつた。天蓋が下ろされ、薄暗い庁舎の白壁に、良兼や良正の搭乗するダークホーンやアイスブレーザーが下野国府西門より逃げ去る姿が映写されている。音声を記録しながらだったので、水守・上総勢の敗走の姿が無音のまま淡々と映され殊更に惨めであつた。映像には国府玄武門より手勢を抑え、一切の破壊を諫める小次郎の凜々しい姿も残つており、臨席した者に概ね好感を抱かせた。

映写が終わり、視線を合わせず向き直つた別当が小次郎に問いかける。

「平将門、是より略門に入る。弁明したき義があれば述べよ」

平伏を解き正面を見据える。別当が小さく身震いした。

（情けない。これが都の役人、そして俺が望もうとしていた役職なのが）

心底の幻滅のため、小次郎は暫し言葉を失つていた。

刹那の沈黙の後、野太い坂東武者の声が庁内に低く響く。

「畏れながらこの平小次郎将門、田舎者故に訥弁の為、先程の映像が全てです。詳細は提出した問注記に記載しました。不義は源護、及び平良正らにあること、訴えるばかりです」

小次郎は成長していた。嘗て滝口の武士として無為に役職に就いた頃とは異なり、都の穢れと己の立場も理解していた。
「相分かつた。明法博士との審議の後、追つて通達する。本日の尋問は終了する」

氣忙しく書類に目を落とすと、別当は立ち上がり去つて行く。あまりに僅かな時間であつた。

自ら寄宿先を申し出た興世王の屋敷に戻ると、俟ちかねていた家主が駆け寄る。

「如何でしたかな、将門殿」

随伴していた桔梗が遮つた。

「興世王様には大変お世話になつております。ですが殿はお疲れ故に、詳細は私が」

言葉通り、小次郎は疲れ切つていた。声を発するのも億劫で、このまま直ぐにでも横になりたいと思い、その旨を桔梗に伝えていた。検非違使庁の門外で待つていたツインホーンに乗つた途端、躰全体の力が抜けるように頽れていた。

小次郎の姿を察し、それ以上は興世王も問い合わせなかつた。

「孝子殿の様なお美しい方であればお話を伺うのはありがたい。将門殿、どうかゆつくりなさつてくだされ」

馬場に去つて行く小型の象型ゾイドを目で追い、小次郎はそのまま控えの間に倒れ込むと、寸刻を待たずに眠りに落ちて行つた。

夢を見ていた。

村雨ライガーに乗つて、坂東を駆け巡る夢だ。

そして村雨ライガーが疾風ライガーにエヴァルトし、更に炎の矢となつて疾駆する。

ただ何気ない、坂東の日常だつた。遠くに鎌輪の館が見える。
ふと振り向くと、館が燃えていた。

「良子！」

半身を起して飛び上ると、既に辺りは夜半を迎えていた。

「漸くお目覚めですか」

皐月、坂東では嚴冬を迎えているというのに、都のある東方大陸北島では既に汗ばむような夜である。薄壁を挟んだ隣の間から、桔梗が御簾越しに問いかけていた。

故郷の香りが懐かしく、小次郎は迷わず桔梗を部屋へと招いた。
「村雨ライガーに乗つている夢を見た」

「よつぽどゾイドが気になるのですね」

桔梗が静かに笑う。宵の風が庭の木々を靡かせている。

「先ほど伊和員経様より便りがありました。数日の後、デイバイソンと共に上洛できること。献上品も一緒だそうで」

「そうか」

小次郎は軌道エレベーターに懸る三日月を見上げた。

献上品、所謂賄賂である。止むを得なかつた。坂東で鍛えたメタル Zi の銃鉄（銃リーオ）などを官人に贈答しなければ、いつまで審議が長引くかわからぬ。百姓衆が心血を注いで集めたものを、無為に渡さねばならない悔しさを思いつつ、片や棟梁である自分が長く下総を離れていれば再び戦の慘禍を繰り返すかもしれない。ケーブルの先に月光を受けて輝くジオステーションを睨み、小次郎は唇を噛み締めていた。

盛大に腹が鳴る。帰宅してから何も口にしていないことに気付いた。

「お食事に行かれますか」

桔梗は口元を必死に抑えている。小次郎は大きく伸びをして立ち上がる。

「飯を食いに行く。主ならば何処か美味しい飯を食わしてくれる場所も知っているだろう」

笑いをかみ殺しながら頷く桔梗を前に、小次郎の腹の虫はもう一度鳴いた。

堪らず噴き出す桔梗。温かい月の光が、二人を包んでいた。

飛び込んだ飯屋で、周囲の客が驚くほどの量を平らげた小次郎が、まだ不服そうにして店を後にした。

「都の飯は薄味でいかん。喰つた氣にならん」

「いい加減にしてください。良子様に叱られますよ」

呆れ氣味に諫める桔梗の声も聞かず、小次郎は飯屋を探し、夜の都を睥睨する。

大路を含め、小路の彼方此方にも浮浪の民が横たわっていた。ゾイドウイルスに冒され放置され、石化したブロックスも散見される。爛

熟を越え、頽廃に向かう榮華の跡がそこにあった。

ふと、暗闇から甲高い鐘の音色が聞こえてきた。淨土を唱える念佛が響く。

(鉢叩きか)

遊行をしつつ、放置された死者を弔う宗教者が、当時数多く都に流れ込んでいた。中には破戒僧としか思えない無法の輩も多く、嘗ては權威を持つて扱われた聖者達も、今はただ似非の托鉢で身を賄う者も多いと聞く。

厄介事は御免だ。今は神も仏も信じる気分ではない。

小次郎は闇に背を向け、別の飯屋を捜しに桔梗を急き立てようとした時だった。

「平将門殿とお見受けする」

闇より、ぼろぼろの衣を纏つた小柄な乞食僧が小次郎の眼前に忽然と現れていた。

桔梗さえその気配を読めないほどの間合いである。

思わず小次郎は応えていた。

「如何にも。私を御存知か」

灯りの下に現れた僧は、片手に持った鉢を納め、もう片方の手にもつた錫杖を地面に突くと、小次郎をゆっくりと見上げつつ呟く。「拙僧の名は光勝。だが皆には空也と呼ばれております」

曳きこまれるような眼力に、小次郎は身じろぐこともできなかつた。恐れなどではなく、温和な瞳であつたが、それが空也と名乗つた僧の徳の為すものなのかなと、虚ろに思つていた。

「空也上人殿、して私に何用でしようか」

戸惑いつつも、小次郎は視線を逸らすこともせず問い合わせる。空也是笑つた。目尻の皺が目一杯刻まれた。

「平将門殿、拙僧の申し出を受けて頂ければ、一匹のゾイドを進呈しましょう」

「ゾイドですか」

「小次郎様、いけません」

ゾイドと聞いて身を乗り出す小次郎を、桔梗が押し留めようとする

る。

当然無駄であつた。

「左様、猩々を模した黒きゾイド。その名を『ツードリーコング』と申す」
小次郎は既に、この怪しい乞食僧の誘いから逃れられなくなつてい
た。

第四拾参話

都の夜には、魑魅魍魎とした輩が無数に跳梁跋扈している。忽然と現れた乞食僧に向かつて、桔梗は小次郎の盾となつて身構えた。

「流石は元群盜頭目桔梗の前、身の熟^{こな}しは衰えておらぬようだ。だが、心に惑いが見える。安堵しましたぞ。あなたも女であつたことに」

空也と名乗つた僧は、剃り残した顎鬚を撫で、深い吐息をついて呟いた。

桔梗は、顔から炎が噴き出すのではないかとばかりに紅潮した。怒りだけではない。正体を見破られたのに加え、見ず知らずの僧に心の奥底まで見透かされてしまつたからだ。狼狽と恥じらいを隠すため、思わず叫んでいた。

「お前は何者だ」

張り詰めた糸を緩めるかの如く、小次郎が二者の間に割つて入る。暗がり故に桔梗が紅潮していることも知らず、武骨な坂東武者は朴念仁のままに。

「孝子、見ず知らずとはいえ上人殿に対し無礼な振る舞いはならん」

しかし小次郎も又、この乞食僧に並々ならぬ圧迫感を覚えていた。「最初に真意を伺いたい。この従者は私の上兵にて、今は孝子と申す。上人殿がこの者の過去を殊更に掘り起こそうとなさるのであれば、私は上人殿を看過することはできません」

「先程の言葉通り、拙僧はデッドリーコングを託せる者を捜しているだけだ。桔梗の前の消息などに興味はない」

穏やかな口調であつた。言葉に偽りはないと感じた小次郎は、肩の力を抜き、桔梗もそれに倣つて構えを解いていた。

「上人殿、してその黒き猩々を模したゾイドとは如何なるものか。そしてなぜに私に」

空也是無防備な背中を一人に向けた。錫杖の金輪が涼やかな音色を奏である。

「まずは御高覧あれ。平将門殿、ついてきてくだされ」

錫杖を響かせ、空也是都の闇の奥に向かつて歩みだした。小次郎と

桔梗は顔を見合せたが、絆ほだされるように妖しい乞食僧の後を追つて行つた。

右京区は条理整備が中途で放棄されたため、未整備の湿地帯が残つたままである。行き届かない管理地の各所には、ゾイドウイルスに冒された残骸が投棄され、時には白骨化した人の骸も散乱するほど荒廃が進んでいた。

空也は素足であつた。足音がひたひたと続く。清貧を旨とする遊行の乞食であれば珍しいものでもないが、その歩調は夜目でも利くのかと思える位の早足である。小次郎達は錫杖の音を頼りに、必死での背中を追う。不思議なことに、不安や迷いを感じることもない。

やがて湿地の対岸に、月光に照らされて黒々と浮かび上がる廃寺の伽藍が現れた。

「小次郎様、あそこに灯が」

淡い光が廃墟の隙間に点つていて。空也は足が泥濘に浸るのも構わらず、湿地を越えて寺院に向かっていく。小次郎達は、僅かに浮かぶ葦の株を踏み締め、対岸まで後を追つた。

伽藍には、低く読経が響いていた。一定の波長を刻む音色は人の鼓動にも思えるが、時折響く不快な高音が人声ではないことを示していた。鋼鉄の壁が目の前に聳え、見上げる先に朱の光を灯した瞳がある。屋台柱の殆どが圧し折られた広大な空間の中、まるで身を竦めるようになその黒いゾイドは潜んでいた。

読経と思えた音色がゾイドコアの脈動であつたことに漸く気が付く。デッドリーコングと呼ばれるゾイドに違いないが、暗がりの中では全身を覗うことができない。頻りに天井を見上げてみたものの、ただの鋼鉄の壁にしか見えなかつた。

「御賞味されよ」

廃屋の何処から携えてきたのか、空也は茶筅を二人の前に差し出した。喉がカラカラに乾いていたので、小次郎は躊躇わずに飲み干した。後から恐る恐る桔梗も椀を手にし、訝しみながら口に含んだ。薬味の強い、曲のある茶ではあつたが、それまでの疲労が霧消するような香りと味わいがあつた。

「拙僧が叡山にて入定していた際、深山幽谷の中で出会つたゾイドだ。是奴め読経の音が気に入つたのか、いつしか経の真似事までするようになりおつた。

ゾイドとは重宝なもので、阿波や土佐、そして陸奥の遊行に伴つてきた。だが思ったのだ。ゾイドに頼るのは遊行としては堕落ではないかと」

空也はそう語つていたが、小次郎も桔梗も、その大型ゾイドが一介の乞食僧に見合つた存在でないことを知つていた。

ゴジュラス、そしてアイアンコングクラスの巨大ゾイドは、この時代天上人、つまり朝廷の血族にしか与えられない貴重なものである。それを手懐けている以上、この僧が朝廷の血族者であることを意味している。襤襷切れを纏つていながらも、この目の前の僧が、自分と同じく遠く帝に血縁を辿る者であることに間違いない。

「将門殿、拙僧は都鄙に於いての念仏を広めたい。それにはこのゾイドは大き過ぎるのだ。将門殿の住む坂東の地にてこそ、このゾイドは活躍できるものと思う。必ず役に立つ。坂東への帰郷に、この猩々を伴つて欲しい」

読経を思わせるゾイドコアの脈動は、相も変わらず低く響く。小次郎はデッドリーコングと思しき鋼鉄の壁を撫でていた。

「無論、ゾイドを受け取ることに異議など御座いません。だがこれ程の大きさとなると、坂東への下向も容易なりません。安易な返答は差し控えたい」

茶を啜つた口許を拭い、空也は微笑んだ。

「御心配召さるな。師氏殿が手配してくれる」

「蔵人頭様が」

その名を聞き、全ての円環が繋がつた気がした。空也は、嘗て小次郎が嘗て滝口の武士として勤めていた際の別当、藤原師氏の寵を受けていた。立場上、表立つて助力ができるない師氏は、この乞食僧を介してこのゾイドを託したのだと推察した。空也は付け加えた。

「師氏殿からの御伝言がある。『藤原純友には近づくな』と」

「あの、海賊衆の頭目ですか」

小次郎の記憶は一気に巻き戻される。無頼の輩と見せかけ、敢えて自分の眼の前に現れた不敵な男だつた。シンカーから吊り下げられたケーブルに掴まり去つてく姿が目に焼き付いている。だがそれ以上の一接点はない。

「師氏様は、如何にして私と海賊との接触を恐れておられるのか」

「純友が将門殿を騒擾の渦中に導き入れようとしているからだ」

それは坂東で勇名を轟かせた平将門にとつて、避けては通れない道であつた。

藤原純友。

しかし将門は不確かながら、その男が自分の運命を大きく変えるような感情を抱き続けていた。

第四拾四話

読経の如き、デッドリーコングのコアの脈動は続く。未だにそのゾイドの正体を見極められない小次郎を前に、乞食僧は茶を啜りつつ三本の指を立てた右掌を示した。

「都は今三つの厄介事を抱えている」

「三つ、ですか」

「まず一つ目は他ならぬ貴殿のこと、坂東での平将門の騒擾」と言つて、指を一つ曲げた。

「だがどうやら一つ目は杞憂に過ぎぬようだ。将門殿に叛意は見て取れぬ」

互いに顔を見合せ苦笑した。「今はまだ」と空也が囁くのを知らず。

「二つ目は瀬戸の内海の海賊衆、藤原純友の騒擾」

最初に上洛した際の紀貫之との会話や、アースボートでの戦闘を思い起そうとする。しかし空也は、小次郎が記憶の糸を辿る間を与えたかった。

「三つ目は龍宮の事、根屋ニルヤに繋がる竜の系譜、ディガルドの暗躍」

桔梗が突然手にした椀を落とした。傾いた廃墟の寺院の床を転がり、デッドリーコングの装甲に当たつて甲高い音を廃屋に響かせる。見れば、桔梗は身を屈ませ胸を押さえている。荒い息をして、小刻みに震えていた。

空也の声色が変わり、幾分問い合わせる口調となる。

「桔梗の前、そろそろ主君に詳しく語つても宜しいのではありますか。俵藤太がディガルドの鎧、避来矢たるゾイド、エナジーライナーを与えられたこと。そして他ならぬあなたが、小蘭笠、志多羅、八面という夷神由来の地震竜セイスモサウルスを受け取った事を」「それは……」

桔梗はそれ以上言葉を発することができなかつた。

小次郎にとつても懸念していたことである。あの日都を去る直前、群盗である桔梗が巨大な竜を3機も引き連れて襲撃してきた理由を、

未だに問い合わせてはいなかつたからだ。

更にもう一つ。

「上人殿、俵藤太とは、下野田原の土豪、藤原秀郷殿のこと御座いま
しょう。何故に今ここで、秀郷殿の名を示される」

空也が桔梗を一瞥した。

「遊行者の情報網は侮れぬものだぞ。将門殿も師氏殿から聞いた覚え
は御座らぬか」

『桔梗と俵藤太は繫がりがあるとの噂もある』。滝口に仕官し、吟唱を
聞いたあの日、秀郷の追捕と桔梗の前との関連を、確かに藤原師氏は
口にしていた。小次郎も思わず桔梗を見つめた。

「語りたくなければ拙僧が申し上げよう」

硬直する桔梗を前に、空也はゆっくりと立ち上がり、伽藍から僅か
に望む窓の外の山々を仰いだ。

「俵藤太、つまり藤原秀郷が瀬田の唐橋に於いて龍宮の姫に請われ、巨
大百足を退治したという説話を御存知か」

小次郎は無言で頷く。

聞いたことがある。だがそれは都鄙伝説に過ぎず、俵藤太の武勇伝
の一つとして真偽を糾すこともなかつた。

「巨大百足は“アースロプラウネ”という、ドラグーンネスト、ホバー
カーゴ、そしてホエールキングに準じる移動要塞型の巨大ゾイドで
あつた。神々の怒りを生き延びたものの野良ゾイドと化し、三毳山の
主として山野に君臨しておつた。アースロプラウネを捕獲したいが
為に、龍宮は豪勇で名を馳せた藤太に依頼した。聞くところによれば、サンカ山窩の郷アイアンロックも絡んでいるらしいが、どの様な技で捕
えたか詳しくは知らぬ。

捕獲は成功し、龍宮はアースロプラウネの再機獣化に着手する。こ
れこそが、瀬田の唐橋と俵藤太の真実であつたのだ

「移動要塞型ゾイド?」

余りの荒唐無稽さに、小次郎も一の句を告げることができなかつ
た。その様なゾイドが存在しているものなのかなと。

小次郎の疑念を置き去りにして、空也は語り続けた。

「これを察知した検非違使庁は、直ちに藤太追捕を命じた。ところが情けないことに、肝心の征東大将軍の任に付く者がおらぬのだ。以前捕縛された経験を持つ秀郷は、下野の地で公の追捕を悉く撥ね退け、エナジーライガードで駆け巡っている。偏に、龍宮ディガルドとの連携があつてこそとも言える」

小次郎は完全に混乱した。四郎将平か、せめて興世王がいてくれればと心底願つた。それでも漸く、いま一つ生じた疑問を、絞り出すような声で呟いた。

「上人殿、龍宮とは如何なるものでしようか」

「それは、それに居られる『孝子』殿に御聞きなされるのが良かろう」桔梗は依然震えながら俯いていた。空也がゆっくりと振り向く。「都は、俵藤太、藤原純友、そして平将門によつて圧迫されている。だからこそソラは軌道エレベーターを一刻も早く完成させ、アースポートから切り離したスカイフック、通称『ソラシティ』の建設を急いでいるのだ。バックミンスター・フラーレンと、メタルZ-iを地方から搔き集めてまでも」

頭上の鋼鉄の壁に、朱の隻眼が見開かれる。瞳をグリグリと巡らせると、読経の響きが一層甲高く吟じられた。遠雷のように警報が木魂する。

「噂をすれば、海賊衆の襲撃のようだ。鴨川を遡上して來たな」

アースポート、清涼殿の方角に噴煙が上がる。

話しの途中ではあつたが、小次郎は言い知れぬ焦燥を晴らす為、今は何かに思い切りぶつかりたかった。

「乗つてみられるか、デッドドリーコングに」

小次郎の心を敷衍し、空也が問う。

「願つてもない。孝子、ついてこい」

小次郎は桔梗の腕をぐいと掴み引き寄せた。それは過去に追われる戦友を救うために差し伸べた腕である。

俺はお前の過去など気にしない。

小次郎の掌の温かみが語つていた。

空也が錫杖を振るうのを合図にして、伽藍に一斉に灯が点つた。

所々を金細工に縁取られた、黒き猩々が背を向けている。眼前に聳えていたのは、ゾイドが背負つた巨大な棺桶であり、その中央瞳を巡らす隻眼があつたのだつた。

「裏側より操縦席は登れる。平将門殿、くれぐれも藤原純友とは関わるのではないぞ」

顕現したデツドリーコングは、村雨ライガーやデイバイソンを遙かに凌ぐ巨体であり、左腕に禍々しい梵字が書かれた布が巻かれていた。空也の指差す先に搭乗用の階段が続き、顔面を鉄甲が覆う。

操縦席に滑り込んだ小次郎は、並列複座に桔梗を伴い、高らかに叫んだ。

「デツドリーコング、貴様の力を我に示して見よ」

読経の音色が途絶え、野獸の唸りへと変わつた。双眸に紫光が灯り、伽藍から黒い塊が疾駆していく。

「坂東武者は、慌ただしいのう」

デツドリーコングの巻き起こした風に檻櫓切れを靡かせ、空也は都に噴き上がる炎を遠望していた。

第四拾五話

都の衆生にとつて、海賊衆の襲撃はもはや見慣れたものになつていった。数機の集団で押し寄せるシンカーは富裕な貴族の屋敷を襲うだけで、貧民層にとつては無関係である。それ故に海賊衆の襲撃への喝采も囁かれ、略奪行為を咎める気運もなくなつっていたのだ。

増長する海賊衆に対し、天人ソラは検非違使を初め、警護使、滝口、押領使などに全兵力を灌いだ筈だった。特に嘗て小次郎が属した滝口の衛士には、セイバー・タイガー、ガルタイガーなどの精銳ゾイドを投入し鎮撫に努めたのだが、藤原純友率いる日振島の海賊衆は、ソラの小手先の警護強化を上回る策を打ち出してきたのだつた。

飛行せず、鴨川の水面を遡行するシンカーの後方に、都では見慣れないゾイドが加わつていた。

白波を蹴立てて歩行する巨人に探照灯が一斉に照射され、小山のような三つの影が浮かび上がつた。迎撃に向かつたガルタイガーの操縦席で、滝口の武士が驚嘆していた。

「あれは、禦賊兵士に恩賜された、アクアコングではないか」

ハイドロジエットとヘリウムボンベを背負つた黒と緑の猩々が、水滴を纏つて都に現れたのである。

飛び交う緊急伝がデッドリーコングの受信装置にも齋され、襲撃してきたゾイドが大型の水陸両用ゾイドであることが判明した。先行したシンカーが、朱雀大路七条・鴻臚館駐屯の播磨国司の兵と戦端を開く。後衛のアクアコング3機が鴨川より上陸し、警護使の小型ゾイドを蹴散らしながら朱雀門に到達、大路を蹂躪して鴻臚館に向かつていた。

“こちら播磨介島田惟幹の警護である。ハンマー・ヘッド部隊は四条通付近に展開、敵と先頭に突入。至急の応援を請う。繰り返す、このままでは鴻臚館は持ち堪えられない。至急応援を請う……”

無線を傍受した小次郎が呟く。

「なぜ海賊は鴻臚館を狙う」

慣れないナックルウォークに僅かに酔いを覚えていた。

「島田惟幹は、備前藤原子高と共に、以前大宰府鴻臚館でのデルポイ貿易で、当時伊予掾の藤原純友と対立した経緯があつたはず。瀬戸の内海で、備前の命を受けた安芸の新興海賊衆藤原倫実との小規模な海戦があつたとも訊き及んでいます。それを根に持つた純友が、一気に島田を潰しにかかつたのではないかと」

背負った棺桶——ヘルズボックス——の操作系を確認していた桔梗は、慌ただしく操作盤を叩きながら応えた。

「して、アクアコングとは」

「嘗て禦賊兵士に配備された水陸両用ゾイド、奇しくもこのデッドリーコングと同じく猩々型です」

「面白い」

桔梗は、小次郎が乾いた唇を軽く舐める仕草を見た。ゾイドに飢えていたことは判っていたが、いざ操縦席に座ると朴訥とした性格は消え、抜身の刃のような鋭い野生が剥き出しになる。

（あなたは御自分の危うさにお気付きなのでしょうか）

心底嬉しそうな様態で戦場に赴く小次郎を、桔梗は畏れを以て見守っていた。

バイキングランスユニットを機首双方に装備したハンマーへッドが、ヒートランスを振り翳してアクアコングに突撃する。鈍重なアクアユニットを装備したコングは、しかし信じられない速さでヒートランスを一蹴し、ハンマーへッドを鴻臚館の門前に叩き落とした。AZマニユーバーミサイルの誘爆の噴煙に紛れ、滝口のガルタイガーがアクアコングに襲いかかる。だが襲撃を見切っていたコングは、左腕に装備されたロケット水中銃を構えていた。水中抵抗にも充分な加速で発射できる大仰な武器は、有り余る貫通力でガルタイガーのジャイロリフターを貫き、突き刺さった銛ごとゴロゴロと機体を横転させた。体勢を戻せないガルタイガーの頭部を、操縦席ごとアクアコングが踏み潰す。劫火の中、ヘリウムタンクを背負った巨神が浮かび上がっていた。

鴻臚館の屋敷から播磨国司の銘の入ったハンマーへッドが浮上を試み、アクアコングの足元を擦り抜けようとする。

ハンマーナックルの剛腕が、宙に舞う撞木鮫を捉えた。胴体中央から圧し折られ、地上に叩き付けられる。操縦席には、播磨介島田惟幹らしき人物が愕然とした表情を浮かべている。

止めを刺さんと、アクアコングが再び左の剛腕を振り上げた。

ガン、という不快な金属の軋みが鴻臚館に轟く。伸びあがったアクアコングの左腕を、別のコングが引き絞つて抑えつけていた。

軋みが臨界を越え、そのまま後方向に左腕が捻じ切られる。悲鳴を上げるアクアコングの背後に、妖しい赤紫の眼光を放つデッドリーコングが仁王立ちしていた。

『文元のアクアコングがやられました』

純友は、上陸させた精強なアクアコングが、いとも容易く擊破されるのを目の当たりにし、舌打ちした。

「機体識別……アイアンコング系……山窩による改造……俗称デッドリーコング、なんだこれは」

圧し折った藤原文元のアクアコングの左腕を振り払い、デッドドリー コングが狂氣の眼光を輝かせる。妖しい読経の声を響かせる、巨大な棺桶を担いだ同系の機体が睨み付けていた。

藤原純友にしてみれば、平将門と接触し、大陸の南島北島同時騒擾を起こす事を画策していた。そしてそれ以上に、荒々しくも純朴な坂東武者と胸襟を開いての話がしたかった。

ところが透破によれば、平将門は夕刻に逗留先から出門したとの報せ以降足取りが途絶えている。ならば無理にでもレインボージャークを誘き出し接触を図るため、シンカーによる空襲と、温存してきたアクアコングをも投入したのだ。

純友の思惑は成功していた。だが出現したデッドリーコングに、再会を願う者が搭乗しているとは知らない。

「何処の機体だ、なぜ山窩のゾイドがここにいる。漂泊民しか操らぬ機体だろう」

純友の言葉はそこで途切れた。デッドリーコングが突進してきたのだ。

横合いからアクアコングがもう1機飛び出し、力任せにデッドドリー

コングを突き飛ばす。

「かしら 頭、挟み撃ちだ」

「文公だな、シンカーも一斉攻撃に移れ。手強いぞ」

倒れることなく踏み止まつたデッドリーコングは、2機のアクアコングを前に再び突進する。

純友は、以前この様な動きをするゾイドを見た記憶があった。アースポーツ襲撃の際、次々とブラキオスの首を切断していく碧い獅子である。

「だが奴は村雨ライガーを操る。此度の上洛も、孔雀型ゾイドで飛來した。平将門であるはずがない……」

刹那、僅かに先行し背後から襲つた三善文公のアクアコングがたちどころに両手両足を切り刻まれた。背負つた棺桶から千手観音を思わせる無数の腕が突き出され、斧、大釜、鉄球、リーオの爪を構えるデッドリーコングの狂気の姿があつた。

破壊されたアクアコングのタンクから一斉に液体ヘリウムが漏れ出し、氣化熱を奪つて周囲を凍結させる。立ち昇る冷氣を纏い、振り返つたデッドリーコングは、身構える藤原純友のアクアコングに対し冷徹に面頬を被つた。

「面白い」

藤原純友が乾いた唇を舐める。互いに知らぬことだが、そこに座る海賊衆の頭領も、小次郎と同じ仕草を行つていた。

平将門の操るデッドリーコングと、藤原純友の操るアクアコング。鴻臚館の前で、2機の猩々が対決の刻を待つていた。

第四拾六話

左腕を圧し折られ、仰向けに倒れていた藤原文元のアクアコングに、別の機体が接近した。人の所作のように頭部を持ち上げ助け起こし、接触通信を試みる。

“兄弟、無事か。大事ないか”

“……文用か。すまぬ、島田は叩き落としたが、不様にやられてしまつた。策を授けてくれた頭に顔向けてきぬわ。おい、あれに戦っているのは三善か”

“俺もいま上陸したばかりでよくわからんが……違うぞ、三善文公ではない。頭だ。いくらゾイド操縦に長けているとはいえ、海賊衆の頭領自らが戦うなど以ての外。文用、俺などに構わず援護に入れ”藤原文元、文用の眼前で、彫金に縁取られた猩々と、藤原純友の乗るアクアコングどが、地響きを立てて格闘していた。それは恰も、海神と月詠による神々の戦いを思わせた。

純友のアクアコングが、リーオで鍛えた鎌を刀身の如く構え間合いを取る。ヘルズボックスから繰り出される攻撃を次々と受け止め、尚且つ右の剛腕を掬い上げ叩き付けた。装着されていた水中銃が弾け飛び、デッドリーコングの頭部鉄甲を直撃する。仰向けに倒れ込む一瞬の隙を狙い、梵字の書かれた襤襷布巻きの腕を掴んで投げ飛ばす。わざわざと蠢く蟲の肢が生えた棺桶が純友の頭上を舞い、盛大に地表に叩き付けられた。

致命傷には至らない。デッドリーコングのオートバランサーが咄嗟に横の受け身を取らせ、衝撃を受け流していくからだ。背部の可動肢が素早く機体を支えると、面頬を被つた奥に赤紫の眼光を輝かせる。

「切りがない」

純友はしかし、命の遣り取りを行う緊張感に陶酔していた。
海賊衆の魁帥を纏める為、長らくゾイドに乗つて戦場に立つことはなかつた。今回の襲撃も、三善文公、藤原文元、藤原文用の播磨介島田惟幹に対する私怨を晴らすという名目で随伴してきた。腹心の藤

原恒利や佐伯是基には散々に引き留められたが、それでも平将門に会いたいが為に、強力なアクアコングに搭乗することを条件に襲撃部隊に加わったのだ。

そこで遭遇したこのゾイドである。初めは肩慣らしに組み合つたつもりが、平将門を捜すという本来の目的を忘れさせ、いつしか純友の本気に火を点けていた。

此奴の強さは機体性能によるものではない。

全身に闘志を漲らせるゾイドは、1対1の格闘に縛れ込むに連れ、背負つた棺桶の腕を使うことを止めていた。

「望むところだ」

純友は頭部に繋がつた伝導管を引き千切ると、ヘリウムタンクとハイドロジエットを排除した。^{ページ} 素体同然になつたコングが激しくドランギングをする。一瞬姿勢を低くした後、大型ゾイドとしては信じ難い瞬発力でデッドドリーコングの胸元に飛び込む。敵が怯んだ隙を狙い身体ごと掬い上げ、今度こそ地表に叩き付けようとした。

純友はしかし、己の策が既に見切られていたことを思い知る。

これ程の手練れと戦うのは初めてであつた。乗つたばかりのデッドドリーコングも、いつしか自分の手足の如く馴染んでいる。小次郎もまた、ビリビリと痺れるような殺氣に酔い痴れていた。

人とのゾイドとの繋がりは、操縦機器などを超越して機体に伝わつて来るからだ。

低姿勢で突進してきた緑色のコングを避けることなく正面から受け止める。衝突の瞬間、咄嗟に伸ばした右拳がアクアコングの顔面を捉えた。甲高い金属音が轟き、緑色の装甲が幾つか吹き飛ぶ。そして「覚悟」

小次郎の呟きと同時に、右腕に装着されたパイルバンカーがアクアコングの頭部装甲を根こそぎ削り取つた。操縦席に座る人物が露わになる。ひび割れた緑色の風防の奥、小次郎は朧^{おぼろ}げに人影が浮かぶのを見据えた。

「彼奴は……」

「……藤原純友」

偶然にも、小次郎の言葉を受けるように、桔梗が告げていた。

勝利の行方は一気に小次郎方に流れ込む。だがアクアコングの操縦席に座る藤原純友の姿を目にした時、小次郎に猛烈な迷いが生じていた。

（貴様は今まで戦つた中での、最高のゾイド乗りだ。海賊衆などに身を賣^{やつ}しているのは余りに惜しい）

「シンカーの爆撃、更に左右より敵」

桔梗の叫びを搔き消して、周囲一面に誘導弾の爆炎が立ち昇った。噴煙に視界を閉ざされた後、純友の機体の前に2つの影が立ち塞がる。

“頭、ここは逃げてくれ。俺達の島田への復讐は済んだ。頭に死なれちや寝つきが悪い”

藤原文用と左腕を失った藤原文元のアクアコングであった。純友も、既に戦いが潮時であることを悟っていた。そして平将門には会えなかつたものの、久方ぶりに手応えのあるゾイド乗りと手合せ出来た充実感を噛み締めていた。

敵が複数と判ると、死の猩々は途端に棺桶から無数の獲物を突き出した。その姿は千手観音に非ず、降魔の迦楼羅炎^{こうまのかるらえん}を纏う不動明王であつた。唸りを上げて疾駆するデッドドリーコングを、藤原文元、文用兄弟のアクアコングが左右から抑える。だが次には、棺桶から伸びた腕によつて全身ズタズタに切り刻まれ、四肢を投げ出し斃れていた。

間断なく続いたシンカーの爆撃が終わつた頃、鴻臚館の周囲には破壊された3機のアクアコングと、それに撃墜されたハンマーへッドの残骸が、漏れ出した液体ヘリウムによつて炎を上げることなく横臥していた。

「名を求める衆を願いとすれば身心疲る。

功を積み善を修せんとすれば希望^{けもう}多し。

しかし、孤獨にして境界なきには。

しかし、称名して万事^{なげうた}抛^{なげうた}んには。

閑居の隠士は貧を樂とし。

禪觀の幽室は閑を友とす。

藤衣紙衾はこれ淨服。
とうえしきん

求め易くして盜賊の恐れなし。

平将門。我と齡を同じうする汝に託す。修羅の先に待つのが地獄ではなく、極楽浄土であると信じて」
空也の口から、聴き取る者のいない低い読経が洩れていた。

第四拾七話

「これは……」

伊和員経は言葉を失つた。

海賊衆との戦闘の翌日。小次郎と桔梗、そして興世王の前には、隻眼の棺桶を背負つた黒い猩々型ゾイドが佇んでいた。相も変わらず、読経を思わすコアの鳴動が低く響いている。上洛したディバイソンと比べても、デツドリーコングの体躯は遥かに巨大であつた。

「よくぞこの様なゾイドが、検非違使等の舎人に咎められず入手できましたな」

首を真上に向け、頻りに黒いゾイドの周りを巡る。

「詳しい事は後で話す。まずは献上品を頼む」

「心得ております。奉納の段取りはお任せ下され」

「それにしても、此度は将門殿にとつてはまさに僥倖ぎょうこうであつたのう」

桔梗の傍らに興世王は敢えて身を摺り寄せ顔を緩めた。露骨な仕草に、桔梗は若干身を引いた。

「隕石の飛来が朝廷を揺るがし、大赦の詔勅が発せられた。将門殿への問注も、これで不問とされるだろう」

興世王の手には、内裏より一斉送信された通達文が表示されたタブレットがあつた。

『帝の元服を受け、けんとく乾徳（賢き帝） 詔みことのりを降し、大赦を行う』

つまり、打ち続くゾイドウイルスの罹患被害や隕石落下、そして駿河の不死山の鳴動などの凶兆を一掃するため、朝廷は恩赦を行つたのである。

あれ以来、あの乞食僧は小次郎達の前に現れることはなかつた。そして検非違使の査問は数日たつても音沙汰は無く、伊和員経が遅れて到着した頃に、やつとこの曖昧な裁断がなされたのである。自らの罪が不間に付され、晴れて故郷に戻れる喜びを噛み締めながらも、小次郎はやはり煮え切れない事実も感じていた。

（これが公の、馴れ合いなのか）

確かに自分は力をつけたが、都の裁きには従つつもりであつた。と

ころが小次郎の脅威を恐れ、此度の裁可が下されたに違いない。蔵人頭藤原師氏の配慮によるものかも、或いはその父小一条大臣忠平によるものかもしれないが、小次郎の望んでいた叔父良兼や良正、源護の責任追及も全て有耶無耶のままに打ち捨てられる理不尽さが胸に痞えていた。

一方興世王は、小次郎の心情など気にかけることなく、相変わらず笑っている。

「レインボージャークにデッドドリーコング、その上ディバイソンときては、我が屋敷が如何に広かろうと到底収まるものではないわ。将門殿、まさに“終に嶋子の壚^{とうし}に帰る”の心境だのう」

そう言つて桔梗の肩を柔らかく——馴れ馴れしく——二三度叩き、忍び笑いをしながら、興世王は屋敷奥に去つて行つた。

小次郎は二つの意味でこの故事が気に掛かっていた。
“嶋子の壚”とは、龍宮より浦の島子、つまり浦島太郎の帰郷の例えであつたからだ。

一つは俵藤太と龍宮デイガルドとの関係、そして桔梗との関わりである。ただし、小事に拘ることのない小次郎の性格は、自ら語ろうとしない桔梗を信じ、その時まで待つことと決めていた。

それよりも二つ目の事の方が遙かに気懸りであつた。あの日見た、鎌輪の館が燃える悪夢である。

(良子や多岐の身に、何もなければ良いが)

その時小次郎はふと眩暈を覚えた。

脚に力が入らず倒れ込む。

咄嗟に桔梗が支えた。

「如何なされました」

桔梗の肩に掴まり、小次郎は目を擦つた。

「やはり都の飯は、腹持ちが悪いな」

姿勢を戻し笑う。

「此度の大赦で御安心され、心の荷も降りて力が抜けたのでしよう。

食事を御用意します」

「構わずとも良い。鎌輪に帰つてから良子の飯を鰐腹食べるのを楽し

みにする」

「そう……ですか」

一瞬、桔梗の表情に陰りが見えたが、やはり小次郎は気付かない。

そして小次郎自身、自分の身体の変調にも気付いていなかった。

盛大な鳴き声を上げる筈の坂東武者の腹の虫は、一切空腹など訴えていなかつたのである。

員経の奉納品の献上の翌日、正式に平小次郎将門の大赦は決定した。帰郷に際し、あの乞食僧の予告通り、デッドリーコング及びディバイソンをも運ぶ巨大な船便の手配は既に終了していた。制御装置を取り付けられたレインボージャークを背に、小次郎は伊和員経との暫しの別れを告げた。

「興世王殿。本当に世話になりました」

「美しい孝子殿とお別れとは名残惜しい。将門殿、息災でな」

「殿、御無事で。孝子よ、殿を頼んだぞ」

「はい、御父様」

まるで本当の親娘であった。

興世王の屋敷を眼下に、董色の孔雀が飛び立った。

坂東まで二日の行程である。想い焦がれた故郷への帰路に、鉛色の暗雲が立ち込めていることを知らず。

坂東は今まさに、燃え上がるろうとしていた。

第四部「坂東燃ゆ」了